

臨床社会学の方法

(9)日常生活

中村正

1. 日常生活への関心

暴力をふるう加害者たちとの面談やグループワークを続けている。子ども虐待、高齢者虐待、夫婦間暴力、体罰をくわえる教師、性犯罪者等へと対象者は拡大する。その内容も多様で、暴力にいたるまでの葛藤があるし、同じ暴力でもそれぞれ異なる背景がある。

また、家庭内暴力という類型化だけではとらえきれない家族問題の多重さもある。そういう人たちを対象にした面談のあり方について悩む。特段の万能薬があるわけではなく、ひたすらひとつひとつの事例に対応しながら、最適だと思えるケース運びについてみんなで知恵をだしている。もちろん加害者臨床や更生のセオリーはあるが、それを当人たちに当てはめるようなことだけはしたくないと思い実践している。

加害者の更生にむけて、暴力を肯定する認知の「歪み」を修正する等として体系化され、主流となった認知行動療法があり、それはまとまったアプローチとして取り組みやすい手法であると感じつつも、とはいえ暴力を問題対処の仕方として身につけ長く生きてきた人たちにプログラムだけで何かうまくいくわけでもないことも脱落率や参加感覚の悪さを見て思う。

さらに各地で起こる紛争や戦争をみると、社会もまた暴力を否定できていないことが目につき、マクロな社会環境がミクロな対人係に与える影響もあり、脱暴力は個人から社会にまで広がる課題であることを痛感する日々である。

そうすると、暴力をふるう人との面談やグループワークを意味づけるための、もう少し大きな、彼の生きる日常生活に着眼して脱暴力を働きかける対象を意識することになる。

ここでいう日常生活は独特な意味をもつことばである。それは、その人が暴力や虐待を含んで組織している「日常生活の論理」を表現することばである。具体的には、意味づけ、解釈の枠、行動の仕方等の組織された日常環境のことである。彼にとって暴力は非日常ではなく、日常性を帯びていると考える。

暴力をふるう人の日常生活の論理、そこには、①暴力を肯定する男性性のジェンダー作用、②問題解決法としての暴力(体罰や躰等)の選択、③暴力を意味づける(言い訳する)ことばと動機の構成、④被害者批判や非難者非難という中和化作業という文脈構成がある。

暴力をふるう人の日常生活はどのように組織されているのだろうか。どんな臨床技法や理論を用いるにしても働きかける対象者の特性を明確にすることは必須である。そこに迫るひとつの手法としてエスノメソドロジーというアプローチが応用できるので、それを紹介しておきたい。

社会学には独自の仕方日常生活をとらえる方法がいくつかある。人間を理解することや社会的行為とは何かを深く掘り下げ、人びとの日常生活における関心と行為の動機について詳細に研究するアルフレッド・シュッツの理解社会学・現象学的社会学がある。

また、アービング・ゴフマンは人びとの相互行為を多様な場面設定において研究している。精神病院での対人関係、対面的相互作用、

スティグマのある人びととの相互作用等である。後の号で取り上げるがゴフマンは「フレーム」分析を提案している。行動分析でもなく精神分析でもない関係性と相互作用の分析単位のことである。

そのなかでもここで扱うのは人びとのやり方や実践の過程を記述するエスノメソドロジーである。前半ではエスノメソドロジーについて紹介し、後半ではこうした日常生活を把握することが対人援助や臨床実践にどう関係するのかについて検討したい。

2. 微細な相互作用を可視化する - 行為動詞で記述する日常生活

エスノメソドロジーはアメリカの社会学者、ハロルド・ガーフィンケルが提唱した方法論である。これは社会の構成員がどのような方法で日々の実践を遂行し、秩序を維持しているのかについて記述するアプローチである。

「エスノethno」は民族や人種という意味ではなく人びと（構成員）という意味である。「メソッドmethod」は、やり方や方法、それに論理や学を意味する「-logy」をつけて構成されている。ある社会や集団の成員が日々の生活実践をおこなうために用いる常識的知識に注目してそれを記述する。

ガーフィンケルは、たとえばアメリカの陪審員の審議経過を詳細に分析し、そこで用いられている市民の常識的知識がどのように事案を整理しているのかについての規則を見いだしている。法律的知識が動員されて何らかの評決にいたるというよりも、常識的知識を総動員し、「事実をみきわめる、例示する、論理的な関係をつける、自らの倫理や常識に照らして事案を整理する、他の人と論議をするための根拠をクリアにする」等の手続きにしたがって、陪審員という集団に固有の知識が使われている過程を研究している。

エスノメソドロジーは、説明する、記述する、会話する、理解する、記録する、定義する等の「行為動詞」をもとにして人びとの実践を把握する。実践の際に用いられている規則や知識の適応のさせ方、会話の仕方、語彙、他者との関係の取り方等が研究対象となる。

たとえば、「パッシングpassing(通過作業)」という実践をとりあげている。この行為動詞で記述されているのは、性別違和感(性同一性障害)をもつアグネスの行動である。インタビュー調査をもとにして記述されている。女性にみえるように自然なふる舞いを行い、女性になりたいと願うアグネスの日常のジェンダー表現の実践作業を記述している。社会が期待する普通の女性を表現するためにアグネスの用いる「取り繕いワーク」である。たとえば身体検査のとき、女性の友人と海にでかけるとき、事実の露見や破綻に備えて実践をしている様が記述される。社会の構成員がもつ性別に相応しい常識的知識を基準にして実践している様子が描かれる。

また、「問題の定式化にかかわる実践」がある。エスノメソドログイストの水川は沢木耕太郎の「おばあさんが死んだ」というルポを例示して説明している(『人の砂漠』新潮文庫、1980年)。ある死を自殺であると定義する際の「手続き」が扱われている。沢木のルポに登場する事例は「栄養失調と老衰のため悲しく死んだ」と報道されたケースである。そのおばあさんの死亡を確認した医師は「心不全(高度栄養失調兼脱水症)」と死因を記した。しかし担当のケースワーカーは異なる印象をもった。「他人の世話にはならない」という言葉を聞いていたので、「自損行為」ではないかと思ったという。沢木は「割り切れなさ」をそのケースワーカーの言葉に感じたという。エスノメソドロジー風にいえば「状況の定義」問題となる。「自然な死としての病死と自殺的な死」の線引きをおこない、それに意味をつけていく作業であるとエスノメソドロジーは考える。

常識的知識はこうした概念同士のつながりをつけることによってスムーズな日常生活の流れをつくるように作用する。「老衰-病死-孤独死」という知識の連鎖と、「抵抗-不信-自損」という知識の連鎖は全く異なる文脈をつくる。ともに成り立つが、医師の判断を起点に前後の物語が編まれていく。死亡診断書は威力をもち、後者の連鎖は退けられていく。亡くなった方の生活をみていたケースワーカーの直感、リアルだけでも弱い。ナラティ

ブセラピーのようにいえばドミナントな（主流となっている）手続きとして病死の確認がすすみ、前者の連鎖が実践されていくことになる（『エスノメソドロジー—人びとの実践から学ぶ』新曜社、前田泰樹・水川善文・岡田光弘編、2007年）。

定式化するという行為は日常生活の論理にそくして納得のいくものとして人びとの「腑に落ちていく」知識を構成する実践である。他にも、孤独死だけではなく、過労自殺、いじめやいじめ自殺、各種のハラスメント等にかかわりこの「定式化問題」（状況の定義）が存在している。何が真相であったのかをめぐり日常生活についてのものの見方が紛争となる。それがどのような文脈で、どんな概念の連鎖として語られるかという「形式」において内容が変化することを記述するのがエスノメソドロジーである。これを「インデキシカルティ（文脈依存性）」とエスノメソドロジーはまとめる。

エスノメソドロジーは、「見られているが気づかれていないseen-but-unnoticed」ことを把握する。たとえば、暴力をふるい、虐待をくわえる人の日常生活がある。彼らのことをジャスティス・クライアントjustice clientという。規範形成に課題をもつ人たちという意味である。彼らが自らにとっての「自然なかたち」で暴力や虐待に頼って生きている様子やそれらを正当化している姿を描く。暴力をとおして満たしている欲求があり、しかも暴力の他に用いる手段がなく、身近な他者を選択する。暴力を用いることが正当化されるように意味付けをし、その瞬間の状況を解釈し、暴力をふるう理由を動機として構成し、その暴力をやむを得ないものとして行使するという経過がみてとれる。

その過程を記述することで、暴力を含みこんで日常生活を組織している様子が見えてくる。暴力や虐待が生成する一連の流れがあり、その都度の出来事が連続体としてあり、暴力をふるう人の日常生活として組織されている。しつけが昂じて虐待へといたると虐待者はいう。ではそこで想定される「しつけなければならない事態」とは何か、それはどう認識、

認知されているのか、暴力を用いてまで修正しなければならないことなのか、そこで暴力を用いることで満たしている欲求は何か等、行為者の文脈依存的な行動としての「暴力の実践」を読み解く。

しかし暴力をとおして満たしているその欲求はあくまでも加害者の側の欲求であり、虐待をくわえられる側に内在する理由があるわけではない。暴力は、時に正当防衛や抵抗として、弱者の側から行使されることもあり、やむを得ないこととして認知される。しかし親密な関係性でおこる暴力の加害は、その関係においてすでに力を持つ強い側がふるう暴力である。ただ、思春期青年期暴力は、時として子どもという立場の弱い者が振るうものであり、それは親という責任ある立場が反抗しにくいという関係を利用して成り立つ。単に立場の権力性ではないこともある。

では暴力で満たす欲求とは何なのか。暴力による自己実現、コントロール感や達成感を満たすこと、暴力をふるう相手を矯正することで正義の感覚を得ること等だろう。これらが暴力を正当化する文脈をかたちづくる。

こうした日常生活の実践を把握することは援助、支援、臨床にいかにかかわるのか。対人援助学にとってのエスノメソドロジーの意義をいくつか関連する話題からみてみたい。

3. 手紙を書く行為の意味—

「被害者への手紙」と「漂流郵便局」

発話行為は（必要な時に発しないことも含めて）、エスノメソドロジーの研究対象である。ことばは日常生活においては何らかの概念を表現するというよりも、その発話（発話しないこと、他者の発話を遮ることも含めて）をとおして何かを実践している。行為に注目するので、たとえば沈黙は「発話の欠如」ではなく、能動的な行為となる例がある。加害にも被害にも沈黙はつきものだし、いじめ、ハラスメント、虐待では無視するという行為として、より攻撃性を増し、積極的な役割を沈黙という行為が果たすことになる。

暴力をふるう人たちは、グループワークでも個人面談でも、十分にはことばがでない人たちである。暴力をふるうその場や状況においてことばは背景に退いている。ことばは暴力行為としての暴言にしかならない。いずれにしても本来の対話を促進させるコミュニケーションとしては機能していない。ことばの沈黙といえる。

ことばが沈黙すると身体が語りはじめる。暴力は彼らの思いや感情を伝える「コミュニケーション」として観念されている。多様な形態のボディ・ランゲージがあり、暴力はそのひとつの形態である。しぐさ、奇声を発する、衣装にこだわる、ピアスやボディ・ペインティング、マスクをつける、サングラスをかける等、実に多様なボディ・ランゲージがある。暴力もこうした身体のことばであることをエスノメソドロジーは描く。

また、他者に沈黙を強いることは暴力のひとつである。これをサイレンシングsilencingという。自ら沈黙することをセルフ・サイレンシングself-silencingという。とくに男性の寡黙さはその作用の典型である。相談をしない、援助を求めないあるいは拒否する、弱さを認めにくいという男性性の特徴を構成するものになる「男性的な日常生活の実践」を根拠づけるのがこの沈黙である。

また、感情作用として、男性性ともかわり感情を表現することばがみつからない事態に陥り、行き場を失った感情は症状として身体と精神に影響することがある。失感情症という名づけもあるので、ことばがないと感情も行き場を失う。感情とことばが結びつかない事態として沈黙や暴力があるとすると、その秘めた破壊力が理解できる。

さらに、暴力をふるう人は他罰性が強い。そうした他者観をもって日常生活を営んでいる。暴力や虐待を正当化する際に罰すべき他者をつくりだすのだ。その他者を矯正するための正義の暴力だと認識している。とくに親子、夫婦、恋人、親友、師弟関係という親密な関係性においてこそ暴力は意味があると考えている。それこそが感情的な絆になると加害者は考えている(中村正「殴る男」に書いたことである。所収されているのは市野川容

孝・鷺田清一他編『身体のレッスン』岩波書店、2007年)。

こうした他者の典型は被害者である。しかし、親密な関係性における暴力の矛先は他者という認識が乏しく、暴力をふるってもよい相手として認識している。他者の他者性は低い。自らの暴力による被害全体の理解や被害者への想像力は欠如する。逆に、罪の意識が構成されず、忘却、無視、回避、逃避する傾向がある。そうなると被害者への謝罪も困難となり、被害への直面化もしにくい。

加害者臨床はこの点を扱うことになる。ことばの沈黙をなくし、他者として認識するためのコミュニケーションへと回路を開く。この点を意識して、刑務所の性犯罪者再犯防止プログラムでは、「届かない手紙」を書くことがある。宛先は自らの被害者である。もちろんそれをいきなり届けるのではない。罪の意識が成立していないと謝罪が攻撃的になるからだ。

また、子ども虐待で離ればなれになっていた親子がコミュニケーションを再開する家族再統合事業において親子間の手紙のやりとりをする。筆者が主宰する「男親塾」でもその練習をする。自らの行いを反省し、子どもの気持ちに配慮するコミュニケーションにする力が要る。届かない手紙として相手を想像して書く。虐待の反省や謝罪こそが対話をすすめるカギとなるが、これがなかなか難しい。「お父さん、どうして殴ったの」と子どもが問いかける。お父さんはあれこれ理由や背景を書く。それは言い訳だらけとなり、子どもからするとまるで子どもが悪いように聞こえる。これでは謝罪にならない。ひとこと、「ごめん」と言えるかどうかその後を決める。

総じていえば、ハラスメント、いじめ、虐待、暴力をふるう人たちは沈黙や言い訳という作用の結果、ことばが出てこない。謝罪や反省のことばを無理に押しつけるようになると表面的なものになる。被害者理解や謝罪のはるか手前の段階にある、痛み、傷つき、悲しみ、弱さ、配慮等の語彙と文脈が自らの内側になんか多い。被害者理解どころか自己理解が必要な人たちがジャスティス・クラ

クライアントである。

そこでまずは自己にまつわるこうした感情が生起するエピソードをみつめる。そのような感情が生じた経験を想記してもらおう。できれば感情生活史として叙述することもすすめる。脱暴力の前の、こころほぐしのための人生の振り返りである。これは自分でおこなうライフストーリーワークである。

鎧を着たようになっているから暴力が必要になるので、その鎧を脱ぐとむき出しになる自己がある。その自己に向き合う。認めたくない自己像も含まれる。自暴自棄となるような不幸も見えてくる。万能感に溢れた自己は、万能でありえるはずがないので、それは逆に傷つきやすさともいえる。暴力は虚勢のようにみえてくる。こうした自己理解のためにも暴力をふるうという行為のエスノメソドロジーは役立つ。日常生活ではあまり意識されない図柄として彼らの日常生活があることを曝きだすからだ。暴力をふるう人に欠けていることや偏りのある実践であることがエスノメソドロジーの記述からみえてくる。そこが眼目である。加害者臨床の対象として暴力という行為に照準することができる。

ジャスティス・クライアントたちとの対話で重視していることは、「他者への想像力」をいかにして育むかである。自ら傷つけた他者は、本来は重要な他者として存在しているはずである。自己をつくり直し、やり直していく際に貴重な人として被害者がいる。なんといっても謝罪すべき相手である。しかし十分に罪の意識がないと、謝罪のことばで相手をさらに傷つける。謝罪は本当に難しい。刑務所ではこうして届かない被害者への手紙を書く練習をしながら、ことばを開発する。ことばがないと感情も生起せず、他者への配慮という心性も生まれず、謝罪のこころが育たない。

伝えたいのにその人宛には出せないし、届けることのできない手紙が世の中にはたくさんある。それを預かる場所がある。「漂流郵便局」という。そこは人びとの思いの詰まった「手紙のミュージアム」である。地域の郵便局を改造している。局長さんもいて、アー

ティストもいる不思議な郵便局である。届かない手紙を受け取るという郵便局である。配達はしない。全国から漂着した手紙が展示してある。訪れた誰かがいつかは読む。もちろんそれは宛先の人ではない。他者の思いを直接には関係ない人たちが読み、自らの思いや経験に重ねる。こうして想像力やつながり感が活性化する。

漂流郵便局には、「届け先のわからない手紙、預かります。」と記されている。「過去／現在／未来、もの／こと／ひと、何宛でも受け付けます。」「『漂流郵便局留め』で寄せられた手紙たちを『漂流私書箱』に収めることで、いつか所在不明の存在に届くまで、手紙を漂わせてお預かりします。」と書いてある。その宛先はいろいろ。ボイジャー1号さま、亡くなったお母さん、神様、あの日のお姉ちゃん、70才の私から80才の私、夕暮れの町であった見知らぬおじさま、あの頃の僕・・・と続々と届いているという。

届けることばがまだないのであれば、絵文字でも、川柳でも、イラストでもいい、少なくとも暴力というボディ・ランゲージではない身体のことばを、言い訳や弁解も含めて、そして少しばかりの謝罪かも知れないが、セルフ・サイレンシングのただ中にいる者たちの手紙を預かり、いつか届けるべき被害者に届くようにする媒介者が「漂流郵便局」のようにあればよいと思っている。沈黙という会話の実践を描きだすことのできるエスノメソドロジーに学ぶことは多い。

4. ことばをかけあう-自殺者の少ない地域の日常生活と関係的存在

問いを反転させて日常生活を把握するとその問題の様相の異なる面がみえてくることを記述するのもエスノメソドロジーの効果である。自己に向かう暴力としての自殺をとりあげてみる。どうして人は自殺をするのかというアプローチでリスクを扱うだけではなく、どのようにして自殺をしないように人は日常生活を生きているのかを追求することである。自殺の動機や理由を探るだけではないタイプ

の自殺の研究、つまりどうしてその地域や集団では自殺する人が少ないのかについての研究である。自殺の社会的な要因研究の先駆けとなったフランスの社会学者、エミール・デュルケームの『自殺論』(中公文庫)は自殺の社会的要因を解明している。現代社会においても当てはまるかどうかは論議の余地はあるが、自殺の社会学的な変数の設定という点では現代においても意義がある研究だ。

『自殺論』では、結婚しているかどうか、宗教はどうか、気温や日照時間等の気象要因、年齢の影響がそれぞれ地域毎、年代毎に考察されている。自殺率が低くなる社会的自然的要因として設定している。

こうした視点と重なるユニークな研究がある。自殺率の最も少ない地域の特性をさぐった研究である。岡さんの書物はそれを現代日本社会に応用し、自殺率の低い地域での人間関係として導き出す。どうして自殺したのかという当人の原因と動機に焦点をあてた研究ではない。徳島県旧海部町(人口三千人)のフィールドワーク調査をもとに『生き心地の良い町-この自殺率の低さには理由がある』がまとめられている(岡檀、講談社、2014年)。

岡さんの問題意識はこうだ。戦争被害者体験についての聞き取り調査をしていて、その心の傷の程度に個人差があるけど、その前後には、兵士たちが戦後に帰還していった故郷やコミュニティの規範、隣人たちの価値観が関係していると考えたからだという。これまで自殺多発地域における自殺危険因子の研究は多いが、自殺希少地域における自殺防止因子の研究は少ないので、後者を研究して社会に環流させればよいと考えたという。

調査の結果を次の5点にまとめている。①いろいろな人がいてもよい、いろいろな人がいたほうがよいという考えがある。②人物本位主義を貫くという。③「病」は市にだせという。④どうせ自分なんて、と考えない。⑤ゆるやかにつながること。

①の例として、「朋輩組(ほうばいぐみ)」をあげている。5歳前後の幅のある若者が異年齢集団をつくり活動をする。「生業にかかわる連携、地域の保安、普請(家屋の修繕)、冠婚葬祭の手伝いなど、地域住民の日常生活に

密着しており、メンバーが暮らすコミュニティと不可分の関係にある」(43頁)という。会則もなく、自由参加であり、ゆるやかな組織である。伝統的な地域互助組織の閉鎖性や強制加入とは相違する。伝統的な組織のようにして地域のつながりを機能させるが、窮屈だと現代人はついてこないのも、自由度も高いように運営しているという。また、アンケート調査を実施して、「ほとんどの人は信用できる」「相手が見知らぬひとであってもほとんどの人は信用できる」という意識が自殺多発地域と比べて有意に高いという。「いろいろな人がいたほうがよい」という積極的な多様性奨励となっている。

③の「『病』は市にだせ」も特徴的である。「病とはたんなる病気だけではなく、家庭内のトラブル、事業の不振、生きていく上でのあらゆる問題」を指す。市というのは公開の場のこと。ひとりで抱え込まずに相談をするということだ。やせ我慢しない、虚勢を張らない、耐えないことがすすめられ、さらけ出すことが大切だという。「でけんことはでけん」と早ういいなさい。はたに迷惑かかるから。」という中年女性の声が紹介されている。

逆に比較調査をした自殺多発地域では自分の個人的な悩みを誰かに相談することについて強い抵抗があるという。うつになった友人を「そりゃさっそく見舞いにいかにゃ」と海部町の人びとは考えている。うつを隠さない、みんなで囲んであげるという気風が自殺防止因子として機能している。その象徴としてこの③がある。

自殺予防因子とは海部町の人びとの日常生活や対人関係である。それは暮らし方のエスノメソドロロジーとして読むことができる。いろいろな変数で自殺危険因子や自殺率の高い町との比較を試みているので、この調査は説得力がある。

この自殺研究から考えたいことは、暴力後のやり直しの生活への示唆が得られることである。暴力を防止する法律により、そして行政の介入により、脱暴力を指南された加害や虐待の当事者たちを脱暴力へと導く回路をどうつくるのかという際に、①から⑤が重なる点である。「暴力と虐待(の事実)を市に出せ」

は家族の秘密をつくるなということだし、夫婦や親子の葛藤から暴力へと昂じていく過程で他者への相談があれば事態はまったく異なるだろうし、「朋輩組」のアイデアは筆者らがとりくむ脱暴力のためのグループワーク「男親塾」に近い。そして暴力をふるう人たちの日常生活それ自体がここで示された予防因子のように組織されていないので危険因子を含んだ様子にみえる。この変容を促すためには臨床やプログラム、あるいは更生を誘導する社会制度（回復的正義や司法、ダイバージョンとしてのカウンセリング受講命令等）として介入することをも契機としつつ、脱暴力への人生の組み換えのために社会ができることを置き石のように設定できればと思う。そのためにも脱暴力へと生きる過程の研究があるので、それを紹介しておきたい。

5. 「ことばにする」という行動さえあれば-逸脱行動を止める過程の研究から

逸脱行動や問題行動の研究は、それ自体を説明しようとする研究が多く、加害者臨床もその人のリスクに着目する。しかしどうして犯罪を犯すのか、なぜ暴力をふるうのかについての研究だけではなく、逸脱行動や問題行動をしない理由やそれが止んでいることに焦点をあてることこそが脱暴力支援や加害者臨床には必要である。こうした研究を離脱研究（デジスタンス *desistance*）という。デジスタンスとは距離をおく、止めておく、しないようにするという意味であり、総称して離脱と表記されている。エソノメソドロジーはデジスタンスを研究することにも役立つだろう。

デジスタンス研究を牽引する英国の犯罪学者、シャッド・マルナは『犯罪からの離脱と「人生のやり直し」』（津富宏監訳、明石書店、2013年）を著している。元犯罪者に対する面接調査をもとにした研究である。「更生した人と更生していない人」に分類して比較分析し、犯罪をした人の更生の要因について考察している。

この研究は、①犯罪をした人の更生とは、再犯をしない状況の持続であり、更生への肯定的な動機付けや自己効力感を持つことが重要であること、②犯罪をした人が犯罪について言い訳や正当化をすることは、一般に、更生の妨げになるとされていたが、更生を促進する側面があること、③言い訳や正当化には文化的な背景があること、の3点が論じられている。それぞれ常識とは異なるアプローチである。立ち直りには独自の日常生活の論理があるという。

たとえば、アルコール依存症の人について、刑罰に対する恐怖、体調の悪化、家庭の崩壊、失職等を契機として断酒の決意をすることが通例だが、このような否定的な動機だけでは飲酒を止める決意を持続することは難しく、断酒の持続のためには、肯定的な人生の目標を持ち、成功体験を重ねることによって、動機付けをより高めていくことが不可欠であるという。

さらに、ニュージーランドの元受刑者調査から、更生した人と更生していない人を比較した結果、それぞれが置かれた社会的環境には明らかな相違が認められなかったが、更生した人には重要な認知的変化を経験しているという特徴があることを明らかにし、特に、「自分の人生をどう考えるか」という点に更生していない人との相違があることを指摘した研究もあるという。自己理解や内省という作業が止め続ける行為には欠かせない。

また、更生の過程における主観面の変化についても論じている。更生の過程では、アイデンティティ、自己像、自分や他者を評価する枠組みがそれぞれ変化すると論じ、具体的には、①青春期の自分の行動や自己像に対する評価が変わり、②時間の流れに対する意識が広がり、③人生の目標が、安定した対人関係を伴うような適切なものに修正される、と指摘した研究を紹介している。

そして、犯罪をした人の更生には、次の5点の内的変容が必要であるとしている。すなわち、①自己陶酔から他者への配慮に移行すること、②社会の価値観を受け入れ、適切に行動すること、③社会的な対人関係における

快適さが高まること、④自分と同じコミュニティの人々に対する配慮をするようになること、⑤人生の意味ということに対する関心が強まることである。

くわえて、更生していない人のうち、長期間の犯罪歴がある人は、共通して、犯罪、刑務所、人生における立場に対して「うんざりしている」と述べていたという。彼／彼女は、犯罪行為をしたくはないが、薬物依存、貧困、学力や能力の不足、社会の偏見のせいで、自分の行動を変化させることが困難だと感じており、自分には他の選択肢がないとも感じていた。更生していない人のナラティブは、「非難の台本condemnation script」(p. 75)という言葉で表現することができるという。自分の人生は破滅的で不遇に運命付けられているという考え方である。このような考え方によって、まっとうな世界では成功できなと感じ、犯罪に代替的な快楽を求めることがある。

更生した人のナラティブには、更生していない人と比較して、①「本当の自分」(88頁)についての中核的な信念の確立がみられること、②人間は宿命を乗り越えることができるという楽観的な見方があること、③生産的でありたい、社会、特に次世代に何かを還元したいという情熱があること、という3つの基本的な特徴があるという。

こうして、「非行・犯罪者の多くは、自分の気持ちや考えといったとらえどころのない事柄とじっくり向き合い、それを言葉にして他者に伝えることに慣れていない」、「非行・犯罪者は、『行動することによって自己の内面を語る者』」だから、「非行・犯罪行為は、自身が内に抱える様々な思いが、無意識のうちに行動に置き換わり、社会規範から逸脱した形をとるとき、表面化する。言い換えれば、心が行動へと置き換わってしまわないうちに、言葉によって形を与えること(言語化)ができれば、非行や犯罪(行動化)をしなくてもすむと考えられる」と記している。総じて、「一貫した信用に足る自己物語を必要とする」(19頁)。

こうした離脱過程を詳細に記述することは逸脱行動を止めている者の日常生活の論理と

実践を記していくことに他ならず、そこで共通に読み取れることをまとめ、加害者臨床や更生に活かすことができる。

離脱研究は社会への再参入のことであり、それを実現することのできる社会的条件が求められている。自殺予防因子と近似のものだろう。暴力をふるう人たちの生きている日常生活の論理を把握し、そこに係留して脱暴力支援が組み立てられるべきという示唆でもある。プログラムとして構成された脱暴力へのグループワークや多様な臨床方法も、こうしたデジスタンス過程の一貫に組み込まれて作用することで脱暴力化にむかう人生の航路(ライフコース)に資することとなる。各種の更生プログラムそれ自体の成否だけを論じていてもあまり意味がない。

6. 日常生活のエスノメソドロジーと対人援助・臨床

離脱過程の研究として非行少年のその後の立ち直りの人生を本人が記述した『ジャック・ローラー—ある非行少年自身の物語』(クリフォード・ショウ著、玉井真理子他訳、東洋館出版、1998年)がある。ジャック・ローラーは酔客から金品を奪うギャングたちのことであり、シカゴでの実話であり、ライフストーリーを自ら描いた文章を社会病理学者が解説しながら記している。

今回は「ことばにする」という行為の大切さを考えてきた。加害者臨床というカウンセリングやプログラムは確かにことばにする意図的な機会として機能する。しかし、ことばにすることのできる日常生活そのものが成立することが本来的な脱暴力へと向かう道だろう。ことばにする必要のない日常生活を組織して生きてきたことそれ自体、つまりエスノメソドロジー的な日常性それ自体の解体がいる。

そのジャック・ローラーの生活史は彼の日常生活解体の記録として読むことができる。社会的処遇 social treatment の経過がショウによって記されている。生活環境の改善に取り組んでいる。逸脱的集団の少ない地域で里親のもとで暮らすように措置をした。その地

域の同年齢集団とかかわるように配慮をし、あわせて就労支援をしたという。これらを当人の日記をもとにして考証している点がユニークである。こうした日常生活が再組織できればことばの発出のしかたも変化していくことになる。

暴力のきっかけを語ることばが一般に貧しい。「頭が真っ白になって」「カッとなって」「あまり覚えていない」「むしゃくしゃして」「酒のせいで」「殴らせる方も問題がある」等と、要領を得ないことばしかでてこない。そのなかで経過を理解するための事実を確認する。それらはこの社会が持つ語りの水準であり、意図的ではないにしろ男性性に由来するセルフ・サイレンシングの効果や自己防衛が働き、どちらかといえば、「沈黙する、言い訳する、取り繕う、回避する、中和化する」等を軸としたことばの実践（発話行為）でしかない。プログラムやカウンセリングだけでこ

とばを紡ぐことは初発の契機にしかない。その後へとつなぐことが大切だ。暴力をふるう人についてのエスノメソドロジーが描いた日常生活の解体とそれに変わるものを入れ替えていくことが長く続く脱暴力の王道なのだろう。

中村正（なかむらただし）
立命館大学／臨床社会学・社会臨床論
2015年5月29日受理